

あとがき

ジョン・ケージという作曲家が作曲した「4分33秒」という楽曲がある。ピアノ演奏者が舞台に出てきて、ピアノの間に座り、演奏を一切せず、時計を見て一定の時間が経ったらペコリとお辞儀をして退場する。第1楽章を33秒、第2楽章を2分40秒、第3楽章を1分20秒で演奏(?)し、その合計時間が4分33秒。会場内の観客のざわめきや雑音などを聴くのである。音楽は音を奏でるものという考えを打破し、「無音」の音楽を演奏するのである。

ではここで、文章は文字を書くという常識を覆して、「無字」の文章を綴ってみよう。核データニュースが次の、そのまた次の世代に受け継がれてゆき、生き続けるならば、今後どのような「あとがき」が寄せられるだろうか期待を込めて....、さあ読んでみよう.....。

空 白

と言うと、「あとがき」の文面が思いつかなかったので、手抜きをしたと思われかねない。この場をお借りして、「文章のないあとがき」なるものを実験的にさせていただいた。手法については是非はあるにせよ、受け継がれる未来は、それを担う者の自由であり、それはまだ空白である。その意図が伝われば幸いに思う。

では、次頁にて真面目にNo.104号の「あとがき」を綴ります。

シグマ委員会が今年で 50 周年を迎えました。昨年秋頃より、委員会に関係された（されている）諸先生・先輩方にお願ひし、お忙しい中、50 周年によせて原稿を作成していただきました。これにより「シグマ委員会 50 周年記念」を本誌巻頭に掲載することができました。ご執筆頂きました皆様に、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

編集している過程で徐々に驚きを感じたことは、1 つのボランティアである委員会が、半世紀も活発に維持されてきていることである。私の考えですが、一組織は、十年ひと区切りと思う。十年で組織やそこで行われている研究を一旦見直し、組織の再編成や、(人間の馴れ合いを防ぐために) 若い人材を投入し、異動とかを行って、常に組織総体として研究目標へベクトルを向けていかななくてはならない。だか、私がここで言っている組織は、給与という利で結ばれた社会的な集まりである。では、シグマ委員会が 50 年間維持され、今後も歩み続けるだろう、その理由は何であろうか？(言葉が悪いが) ボランティア活動であるから、委員の方々は何の報酬も利益もない、しかもご自分の研究はもとより、所属する組織の運営も維持していかななくてはならない立場でもあろう。独立した研究者達の自由粒子を、1 つにまとめる求心力は何であったのだろうか？委員が入れ替わっても同じく作用する力は何であるのか？このことを、巻頭の記事の中から読み解く努力は必要であろう。組織力を維持していく「秘訣」が、隠されているはずである。そうでなければ、形骸だけが残り、消滅してしまっているはずである。

2013 年、近畿大での春の学会にて、
合同企画セッション「シグマ委員会設立 50 周年をむかえて」
というテーマで講演が企画されている。早速、「奇貨おくべし」である。

2013 年 2 月号編集

日本原子力学会核データ部会
核データニュース編集小委員会

喜多尾憲助 (元放医研)、井頭政之 (東工大)、石川 眞 (原子力機構)、
岩本 修 (原子力機構)、中川庸雄 (元原子力機構)、吉田 正 (東工大)、
渡辺幸信 (九大)、山野直樹 (福井大)、河野俊彦 (LANL)、大塚直彦 (IAEA)
中村詔司 (委員長、原子力機構) [編集]石橋貞子